

令和8年度第1回柏市教育福祉会館運営協議会会議録

1 開催日時

令和8年8月17日（月） 午後2時から午後3時30分まで

2 開催場所

ラコルタ柏4階集会室（柏市柏五丁目8番12号）

3 出席者

(1) 委員（8名）

堀内委員（会長），岩永委員（副会長），赤松委員，伊藤委員，坂上委員，杉山委員，丹間委員，森委員

(2) 関係部署（5名）

矢部福祉部長，宮本生涯学習部長，宮脇福祉政策課長，田中生涯学習課長，橋爪中央公民館長

(3) 事務局（12名）

江藤中央公民館課長補佐，豊島中央公民館係長，鶴岡中央公民館主事，江幡生涯学習専門アドバイザー，高野山生涯学習専門アドバイザー，村田生涯学習専門アドバイザー，松林福祉政策課課長補佐，泉田福祉政策課係長，中間福祉政策課主事，影山ラコルタ柏コーディネーター，二瓶ラコルタ柏コーディネーター，江里口柏市社会福祉協議会地域福祉課主事

4 議題

- (1) 前回の振り返り（報告）
- (2) 令和8年度事業計画及び実施状況
- (3) 教福連携事業について

5 議事（要旨）

(1) 議題1 前回の振り返り（報告）

資料6ページから7ページについて事務局から説明を行った。委員から表明された主な意見・質問は次のとおり。

・ラコルタ柏フェスティバルについて

（赤松委員）参加団体の出席負担を減らす見直しは非常に評価している。ただ，これらの運営変更内容が事前にしっかりと団体に周知できていれば，締切までにより多くの参加団体を募ることができたのではないか。参加団体の中には「内容は以前と同じだろう」というイメージがついてしまっている。全体的なりニューアルを行う際には，ざっくりとしたイメージだけでもよいので，前もって団体に伝えておく配慮が必要だったと感じる。

(事務局) 事前の丁寧な通知や説明が不足していた面があると受け止めている。今回の見直しにより、参加団体は増加したが、さらに周知が徹底できていれば増やせた可能性がある。今年度も実行委員会の中で今回のプロセスをよく振り返り、今後は事前に十分なお連絡やアプローチが行き届くよう体制を整えたい。

・生涯学習事業の地域展開（近隣センター等との連携）について

(丹間委員) 出張事業等の形で各地域に広がっていくことについてすでに具体的な話し合いや計画が進められているとのことだが、今後の具体的な展開はどうなっているか。

(事務局) 学びを地域に広げる事業（近隣センター等を会場とした講座）については、今年度から開始し、概ね5年間をかけて市内の全21地区に順次展開していきたいと考えている。また、生涯学習分野での学びをその先にある地域づくりや社会参加に繋げていくため、関係部署（生涯学習部、市民生活部、社会福祉協議会等）を交えた打ち合わせを通じて役割分担や連携、意識合わせを図っていく考えである。その前段として、直近に開催される東葛地区の社会教育関係者を対象とした研修会に、関係部署の職員も参加してもらい、関係者間でのより緊密な意識合わせと連携につなげていきたい。

・総合福祉センターの休日のイベント開催について

(坂上委員) 平日に仕事をしていて地域と繋がる機会がないママやパパに向けて土曜日や日曜日、祝日にもイベントを開催するよう見直しを行っていただき、感謝している。実際に土日開催を行ってみて、来館者や参加者にどのような変化が見られたか。

(事務局) 土日にイベントを開催すると、ファミリー層の皆様にご参加いただいていると実感している。平日は母子の二人で来館されることが多いが、土日祝日に父親がお休みの機会があると、午前中からご家族全員でイベントに参加され、午後はお昼ご飯を館内で食べて過ごされる、といった様子が見られるようになった。

(坂上委員) 平日だと母親が子供を連れて来館するのはどうしても大変であり、それが来館をためらうブレーキになりがちである。しかし、父親も一緒に参加できる休日であればマンパワー的にも来館しやすくなり、ハードルが下がると感じる。一度休日に来館してみて「これならママだけでも来られる」と安心できれば、平日の利用促進にも繋がる可能性がある。今後も無理のない範囲で休日のイベント開催を計画・継続していただきたい。

(2) 議題2 令和8年度事業計画及び実施状況

資料8ページから14ページについて事務局から説明を行った。委員から表明された主な意見・質問は次のとおり。

・地域課題解決事業（高柳地域）及びガーデニング講座について

(丹間委員) かつて地縁の他孫（たまご）事業等で地域活動のモデル地域であっ

た高柳地域ですら、現在は世代交代等の課題に直面しているのだと知った。これに対し、公民館として伴走支援やヒアリング、PCMワークショップなどの主体的な関わりを進めていることは先進的である。今回の関係者ヒアリングは具体的にどのような体制で行ったのか。また、ガーデニング講座の事業紹介において、受講生という受け身に留まらず、地域で自立的に活動する「ガーデナー」へと成長し活躍している様子が示されている。単に知識を得るだけでなく、学習を通じて住民が社会参加し自立していく変容のプロセスを、より具体的に伝えることが公民館事業として重要である。

(事務局) 高柳地域でのヒアリングは、生涯学習専門アドバイザーと事務局の市職員の計4名で実施。地域活動を長年支えてきた関係者や、中学校の校長先生、地区社協の代表など多方面から話を伺っている。ヒアリングを通じて、住民側も従来通りの組織体制にこだわっているわけではなく、むしろ新しい形での世代交代を強く望んでいることや、若い世代にバトンを渡したいという前向きな思いがあることが見えてきた。今後はPCMワークショップを活用し、関係者間の横の繋がりを公民館がハブとなって作っていく。地域で多様な主体を巻き込みながら、新しい地域づくりの体制ができる可能性を感じている。

(事務局) ガーデニング講座については、最初は講義を受けるだけの受講生であったが、受講生同士の人間関係や講師との繋がりが育まれる中で技術や自信を習得し、現在では地域の文化祭等でドライフラワー作り等を住民に教える講師側へと回る方々も生まれている。このように、公民館をハブとして育った人材が地域や学校へ戻り、自主的・主導的に活躍している。地域や学校からニーズを汲み取りながら資材や人材が循環する双方向のネットワーク形成に繋がっている。

・サマーイベント及びあ・えーるテラスについて

(杉山委員) サマーイベントは、多様なイベントを通じて社会や地域とつながるきっかけを作る素晴らしい事業だと思う。自分もまだ若く、社会参加するにはどのような選択肢があり、何をすればよいか分からない状態だが、このようなイベントを通じて知ることができるため、非常に意義深い。ただ、単なるきっかけで終わらせず、イベントを機に関心を持った若者が、その後の活動やボランティアを継続して探せるような仕組みがあるとさらに良いのではないかな。

(事務局) サマーイベントを機に出会った若者がその場限りの参加で終わらず、次の社会参加や自主的な活動、あるいはボランティア活動等のステップへとスムーズに移行できるよう、今後の相談支援やコーディネート仕組み、情報提供のあり方を工夫していきたい。

(伊藤委員) 文部科学省が示す生徒指導の4つの視点（自己存在感があること、自己決定ができること、共感的な人間関係、安心安全な場であること）は、あ

・えーるテラスにおける取り組みと非常に親和性が高い。活動の成果として、単なる実施イベント数や参加人数といった数字の報告だけでなく、利用者が役割を持って関わり合い、安心安全な居場所が実際に構築されているプロセスや会議の様子などを可視化して伝えと、より事業の価値や整合性が明確に伝わるのではないか。現在、全国で不登校の児童生徒数が約35万人いるが、学校に行くことだけが最大の目標ではなく、最終的には「助けて」と大人に言えるようになることが重要であり、あ・えーるテラスの活動は、まさにそのような生徒たちが社会と繋がるための貴重なインフラである。

(森委員) サマーイベントが若者や地域のプレイヤーを巻き込む「入り口」として機能している一方で、あ・えーるテラスの企画会議において、実践されたイベント数が令和7年度の10件から、令和8年度は2件と減少している。サマーイベントを機に「やりたいこと」を見つけても、それを継続して形にする過程で、何かしらの課題やサポートの限界があるのではないか。

(事務局) 企画会議では、当初は本人が意気込んで企画を進めるものの、実施に向けた準備の途中で体調を崩してしまったり、急な不安に襲われて頓挫してしまうケースが課題となっている。1人ひとりの状態が異なるため画一的な支援は難しく、個々に合わせた細やかな寄り添いが必要である。ゴール設定を高くしすぎず、1cmでも良いから『小さな一歩』をステップアップして自信に繋がられるよう、現在試行錯誤しながら実践している。

(森委員) 長野県塩尻市の地域活動支援では、「3人集まればイベントを開催してよい」という低いハードルを設定。そのように少しずつ自信を持たせるような関わり方が効果的だと思う。また、あ・えーるテラスを利用する具体的なメリット（例えば会場を安価あるいは無料で使える、親身に相談に乗ってくれる伴走者がいる等）を「見える化」して発信すると良い。一人では「できない」と不安になることでも、「ここに行けば伴走してくれる」と分かれば、ハードルが下がりより気軽に参加しやすくなるのではないか。

(丹間委員) あ・えーるテラスの企画会議の本質は、「一人ひとりの小さな一歩が、どのように生まれ、広がっていったか」という個人の内面の変化が最も重要な事業価値なのだと、今のやり取りを通じて改めて確認できた。プロセス自体を、活動・成果として可視化して伝えていけるとよい。例えば、資料にある写真も、企画会議中の様子ではなくイベント当日の写真のため、会議の中で皆が役割を持って話し合っているプロセスそのものの写真や様子を示せると、結果として事業への理解や参加者の増加につながっていくのではないか。

(赤松委員) あ・えーるテラスについて、最近は楽しそうな笑い声や会話がよく聞こえてきて、外からは何をしているかが見えなくても、楽しそうに皆が集まっているのが声から伝わってくる。夜間に通りかかる際にも、子供や大人が楽しそうにしている様子を見かけ、「楽しそうだね、何をやっているんだろう」と来館者の間でも話題になっている。数字では見えにくいですが、このような「安心安全な居場所」が生まれ、活気が出ていること自体が素晴らしい成果だと感じる。

(3) 議題 3 教福連携事業について

資料 15 ページから 19 ページについて事務局から説明を行った。委員から表明された主な意見・質問は次のとおり。

・ラコルタ柏フェスティバルについて

(丹間委員) 地域のサークルや団体にとって、こうしたお祭りは日頃の成果を発表する場であると同時に、新たなメンバーを迎え入れて組織を活性化させるきっかけとなっている。しかし、各団体の高齢化が進みメンバーが先細りしている現状を考えると、フェスティバルが「新しい人と出会い、新しいチャレンジができる場所」であるという魅力を外に向けて発信し、巻き込む仕掛けを作らなければ、これ以上の変化や発展は難しい。今後のさらなる仕掛け作りや、広報の強化についてどのように考えているか。

(事務局) 開催回数を重ねる中で、当初の盛り上がりの熱量が落ち着いてきたことや、各団体のメンバーが高齢化・固定化していることが参加の減少に繋がっている。これまでの歴史を継承しつつも、若い世代や新しい方々が「面白そう」「自分たちも新しくチャレンジでき、人と出会える場所だ」と感じられるよう、広報のあり方を見直す必要がある。事務局企画枠を新設する等柔軟な受入れ体制を整えつつ、お祭りとしての「新しい出会いと繋がり」を創出し、各団体の新陳代謝を活性化するような「その後の仕掛けづくり」に、今後も試行錯誤しながら積極的にチャレンジしていきたい。

6 その他

事務局から、次回開催日程を示した。

7 傍聴

傍聴者 2 名

以上